

あんげろす

キリスト教とアイデンティティ・ポリティクス
—ウクライナに想う—

久保田 浩

復活節に入って、ウクライナ西部に避難した神品（聖職者）が執り行う奉神礼の様態をはじめ、正教会の動向がメディアで紹介されるようになった。

正教会が支配的な地域は、民族文化伝統および政治体制と結びついた正教会が国民教会的役割を果たすことが多いが、ウクライナでは、国家成立の事情から宗派的多元状況が見られる。

1991年の独立以降、社会主義体制期に由来する無宗教者と、三つの正教会と一つの東方典礼カトリック教会の信徒が国民の大多数を占めてきた。それぞれの教会間の競合、またその内部の紛争は、国民の教会離れを促し、ロシアに見られるような国民教会的な唯一の教会という制度も存在しない。

だが、文化的かつナショナルなアイデンティティを担保する存在として正教会が政治利用される傾向は、2014年のドンバス戦争以降、特に顕著となり、2018年にはポロシェンコ大統領の下で二つの正教会の合同が推進され、ウクライナの民族的・文化的統一の象徴として誕生し、残る（モスクワ総主教庁系）正教会との関係が断絶した。ロシアの侵攻後は、後者の財産没収と国有化が要求され、5月末になって神品たち自身も総主教キリル1世との決別を宣言した。正教会の国民教会化が進んでいるのである。

モスクワのロシア正教会の神品が、正教会の共通性に基づく両国の正教徒の融和と団結を訴え、新ウクライナ正教会の神品がプーチン大統領を反キリストと呼ぶ……。このように正教会は、相反するアイデンティティ・ポリティクスを支える役割を担われ、分裂の危機に直面している。キリスト教は、いかなるアイデンティティ形成に寄与してきたのか、改めて考えさせられる。

くぼた・ひろし（所長）

第88号

2022年7月



「点」と「線」

岡村 淑美

3月に刊行された『松山高吉史料集第3巻』では、松山高吉と下村孝太郎の交誼をテーマに書いた。この話を受けた時、はてさてどういった資料をもとにどうまとめようかかなり思い悩んだ。図書館などで資料を探したが、二人についての記述も概略程度のものしかなく、はてさてどうしようかという中で見つけたのが、スキャン資料にあった松山のほぼその人生を書き留めた日記であった。

1日に、わずか数行。その日あった事実のみの簡素な記録。誰が来た、誰に手紙出した、など。書いてない日も多い。しかし短歌の作成時期と照らし合わせながら読むと、いつどこでの作歌だったのか、また短歌には表されていないけれども誰と一緒にだったのかなど、短歌や日記だけでは「点」だったものが「線」として結びつくことで、まるで映像化されたかのようにその時の情景が浮かび上がってくるのだ。松山の日記という糸口を見つけてからは、方向性も定まり、ワクワクしながら一気にまとめた。

その仕事と並行して書いていたのが、キリスト教研究所紀要第54号に掲載の「1900年前後明治学院普通学部教育事情の一考察」である。ここで、台湾からの留学生第一号は、どうも「周福全」という人物らしい、と取り上げた。「らしい」と推測したのは、台湾側の記録からしか彼が明治学院に在学していたという記録が見つからなかったからである。当時の学籍簿もなく、成績簿もなかった。私が持っている資料館のリストを見る限り写真もない。歴史資料館にも足繁く通ったが、要覧にも載っていない。従来明治学院の台湾からの留学生第一号としていた李延禧については、彼の結婚披露宴の招待状まで見つけてもらったのに、周福全の痕跡は見当たらず。従って推測にとどめるしかなかった。

その原稿の第二校をチェックしていた時である。明治学院歴史資料館がおりしも明治学院デジタルアーカイブズを公開した。本当は2022年2月1日公開予定と聞いて



写真1 集合写真里見、森田他学院時代

1897(明治30)年前後撮影。後列右より、森田金之助、一人とんで「台湾人チユウサン」、さらに一人とんで里見純吉(大丸元代表取締役)。明治学院歴史資料館所蔵

いたのだが、なぜか若干早まった。早まったことそのものは、本来なら喜ぶべきことなのだが、公開を知って即アクセスをし、漫然と「台湾」で検索をかけてみたら、非常に気になる写真が出てきたのである。普通学部、神学部の卒業生で、ウエルミナ女学校(現大阪女学院)の日本人初代校長でもあった森田金之助の明治学院在学時代の集合写真である。周が在学していたと推測できる時の在学生でもある。ドキドキしながら写真をクリックすると、裏書き付き。なんとそこには、「台湾人チユウサン」と書いてあるではないか。

ああ、探し人発見。

感激するやら絶望(!?)するやら形容しがたい興奮状態で、なぜもう1ヶ月早ければなんとか紀要原稿に入れることができたかもしれないのに……もしくは予定通りの公開だったらこんなに絶妙な悔しさを味わわずに済んだのに……など、もどかしく悔しい思いを抑え込んで第二校を戻したのである。

もちろん「チユウサン」と書かれているからといって、本当に周福全と断定できるわけではない。ただ、明学側



写真 2 「台湾人チュウサン」(写真1の切り取り画像)

の資料からは全く存在がわからなかったものが、影ぐら
いとはいえ明らかになったのは大きなことであった。

そんな悔しい思いを抱えながら、今度はやはり歴史資
料館から『明治学院歴史資料館資料集 第18集』が手元
に届いた。明治学院神学部卒業生の山田幸三が記した日
誌の翻刻である。周がいたのはこの時期なんだよな、
1900(明治33)年以降については鈴木春をはじめ、白金学
報も発行されたことで当時の様子が書き綴られているけ
れども、その直前の明学生たちについての記述は極端に
少ないんだよな、など思いながらパラパラめくっていると、「台湾」の文字が飛び込んでくるではないか。そして何故か「周添祐」(福全の幼名、別表記「天祐」)も出てくるではないか。

小見出しには「井深梶之助日記との併読のすすめ」と
あり、「台湾留学生周添祐の入学」について山田と井深
の日記を取り上げている。この記事によると、私が周の
入学は早くても1896(明治29)年1月以降、4月には遅く
ても明治学院普通学部に入學したのではないかと推測
したが、両者の日記から、同年1月3日に入学したと判
明した。ここでも情報単体では「点」だったものが複数
あることで、「線」が浮かび上がったことになる。

判明したことは嬉しくもあるが、写真を見つけた時と
同様、自分の調査・執筆とほぼ同時期に、目と鼻の先で

というか白金キャンパスというほぼ同一空間で、知らぬ
間に周福全のことが取り上げられていたのは、やはり感
動やら悔しいやら、さまざまな感情が入り交りしばらく
興奮状態になった。しかも井深梶之助の日記の存在も知
らなかったのは、悔しい、の一言。

日記そのものは、書き手は読み手を意識して書いてい
るわけでもなければ、松山高吉のように淡々と事実のみ
の場合も多く、それ単体で読むことはあまり面白味がな
いのは事実だろう。しかし他と併読することで、新たな
ことが浮かび上がるという経験は、思い返せば学生時代
から何度もしていた。ゼミで、川端康成や野上弥生子の
日記をワクワクしながら読みすすめた記憶は、今でも強
く残っている。

そして日記に限ったことではないが、「点」はやがて
「点」同士が結びついて「線」になるのは、調査・研究
の喜びの原点でもある。

おかむら・よしみ(協力研究員)

「黒い手」にあらがう子どもの日記

柿本 真代

私の専門は児童文化史で、とくに明治期の少年少女向
けの雑誌を研究対象としてきた。当初は、明治期の子ども
の日記に書かれた読書体験を掘り起こせたら、と思い
2014年から明治学院大学の田中祐介さんが組織された
日記の研究会に参加させていただくようになった。しか
し、日記に書かれていることを史料として扱うことより
むしろ、日記帳そのものの出版や流通、そして「誰に
みせるものでもない」「自分のために書く」はずの日記が、
日本の学校では宿題となり「添削」を受ける対象になっ
たという不思議な現象のほうに関心をもつようになり、
これまで3本ほど日記に関する論文を書いてきた。

日記を研究対象にしはじめてからは、日記に関する記事やドラマや映画のなかでの日記の描かれ方など様々なものが目につくようになったが、最近気になったのは「子どものころ見えていた『黒い手』の話」というイラストレーター、ミカヅキユミさんのコミックエッセイである（ミカヅキユミ『背中をポンポン』ライブドアブログ、2022年3月16日～30日）。

耳が聴こえないミカヅキさんは、子どものころ文章を書く訓練の一環として日記を毎日書き、それを先生にチェックしてもらっていたという。当時小学2年生だったミカヅキさんはある日、「わたしのうちのチャイムは押すと家の中のランプが光ってくるくるまわります。／わたしは耳がきこえないのでランプを見て「おきゃくさまがきたんだな。」とわかります」と日記に書いた。ミカヅキさんは先生からのコメントを楽しみにしていたが、後日返ってきたノートには「きこえない」に線がひかれ、「きこえにくいと書きましょう。難聴とも言うよ」とのコメントがつけられていたという。「自分の「きこえ具合」の表現を 私しか知らない感覚を／他人から訂正されたことに衝撃を受けた」とミカヅキさんは綴った。

この漫画は、4月にTwitterでも投稿され話題になり、ハフポストでも取り上げられた。ハフポストの取材に対し、ミカヅキさんは「多くの方に「意識せずとも持てる権力」を身近なこととしてイメージしやすいような漫画を描けたら」との思いから、このエピソードを取り上げたと回答している。ミカヅキさんは「意識せずとも持てる権力」を「黒い手」と表現し、子育てをするなかで自分自身も「黒い手」の持ち主になってしまったと感ずることもあり、「考え続ける」という名の余白を持つよう心掛けるようになったという（名嘉真瑠花「聴こえない私が「きこえ具合」を訂正された。価値観を押し付ける「黒い手」の正体とは？【体験マンガ】」Huff Post 日本版、2022年5月25日更新）。

私はいわゆる養成校、保育士・幼稚園教諭を養成する大学につとめているが、よく指導することのひとつに、

子どもの姿を肯定的にとらえることがあげられる。たとえば「泣いてばかりで手がかかる子」とみるのではなく、「泣くことで自己主張ができるようになってきた」姿としてとらえられるのではないか、ということである。そしてこの肯定的なとらえ方は記録として子どもの姿を「否定形で書かない」ことにもつながる。

しかし、大人が子どもの様々な姿を肯定的にとらえることと、子どもの内なる感情や表現を「前向き」に強制しようとするとはまったく違う。このエッセイを読んだとき、いまさらながらそのことを強く感じ、そして学生たちにこのことを丁寧に伝えられてきたらどうかと一抹の不安がよぎった。私自身が「黒い手」の持ち主として、「黒い手」の持ち主を再生産してはいなかったらどうか…。

ミカヅキさんにとってこの指導はショックだったが、自分にあてはまらない表現だと感じ、その後も「きこえない」を使い続けた。その結果、次第に訂正が入ることはなくなったという。「書きたいまんま書ける」ことが「きもちいい」と感じたとき、ミカヅキさんは綴っている。

おそらく「～らしさ」を身に付けさせる、「～らしい」ことばを内面化させるために、日記ほど有効なツールはないのではと思う。しかし一方で、ミカヅキさんのように「黒い手」にあらがって自分のことばを貫くことで、自己表現の気持ちよさを味わったり自分の感性を育てたりという側面も日記にはあるのだということ、このエッセイを読んであらためて感じた。

これまで私は先生の指導や添削に沿って書くべき事柄や書くべきことばを身に付けていく子どもたちの様子を、日記から読み取ってきた。しかし目を凝らしてみれば「黒い手」にあらがおうとする子どもの姿が浮かび上がってくるのかも知れない。そんな視点から、また子どもの日記を読み直していきたいと思った。



参考：

ミカツキユミ『背中をポンポン』ライブドアブログ
<https://senaka-ponpon.blog.jp/>

(2022年6月3日最終閲覧)

名嘉真瑠花「聴こえない私が「きこえ具合」を訂正された。価値観を押し付ける「黒い手」の正体とは？【体験マンガ】」Huff Post 日本版、2022年5月25日更新
https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_628c4ac3e4b0933e7369a8d6 (2022年6月3日最終閲覧)

かきもと・まよ (協力研究員)

雑録

昨年度の秋学期から対面実施を再開する授業も徐々に増え、今年度の春学期はさらに増加した。キャンパスには学生の姿が戻り、マスク着用で談笑する様子が自然に目に入るほどになった。

対面授業のためにキャンパスを訪れる学生が、別の時間のオンライン授業を学内で受講することも少なくない。ラップトップ PC やタブレット端末の持参も常識となった。

新型コロナ禍以前、私が担当する授業の一つでは毎回小テストを実施し、BYOD (Bring Your Own Device) の方針を立て、授業時間内にスマートフォンで e-Learning にアクセスし、制限時間内に小テストに解答するよう求めていた。毎回小テストを終えた後は、印刷したワークシートを配布し、各自が授業内の課題に取り組むこととした。

授業改善の一環として、クラスの受講生全員 (75名規模) にタブレット端末を提供することが叶えば、より双方向性を重視した授業設計ができるのに、と夢見しながら、実現の足がかりを見出せないままであった。

新型コロナ禍を経て、受講生のほぼ全員が自前の PC やタブレット端末を机の上に置き、小テストに取り組み、

その後の授業課題にも e-Learning 上で取り組む姿を見ていると、空前の災厄がきっかけでかつての夢が実現したことに、複雑ながら感慨を感じる。印刷物の配布と回収は、当初は感染防止の観点から取りやめたが、今後、後戻りをして復活することはないであろう。

このような高度の BYOD 環境が、学生側に無理のない形で今後も整うならば、双方向性を高めた授業設計も十分に可能と思われる。かつて思い描いた構想は、検討して然るべき具体的な課題になった。

便利になる一方で、些細なことながら寂しさを覚えることもある。担当する別の授業では、かつては授業内容に基づいた考察を記すリアクションペーパーの提出を課していた。オンライン授業の開始に伴い、その課題は e-Learning 上での「考察課題」に転じた。対面授業の再開後も、紙の提出に復帰することはなく、オンラインでの課題提出はすっかり定着した。

紙の提出を求めなければ、提出のために受講生各自が教壇に立ち寄る必要もない。リアクションペーパーに記載された氏名から、顔と名前が一致することもない。提出のついでに、質問ともならない雑談を交わす機会もなくなった。

もちろん質問がある学生は従来と変わらずに来るし、授業外で接することもある。一部の学生と、提出物がなくとも雑談を交わすことは皆無ではない。しかし紙の提出時の雑談がなくなってみると、何気ないやりとりを楽しんでいたことに改めて気づかされた。ペーパーレス化には全面的に賛成する立場だが、図らずも紙のやりとりがなくなったことで寂しさを覚えた次第である。

技術が高度になれば、学生との接し方もまた変わる。教育指導上のやり取りの本質は変わらないとしても、何気ないやり取りの形が今後どうなるか。変化を見据えるとともに、新たな機会を楽しみにしたい。

たなか・ゆうすけ (主任)

研究所活動（2022年4月～2022年6月）

2022年度アジアキリスト教講義シリーズ（春学期）

（各回 18:40-20:10）

第1回 5/17（火）「中国近代知識人のキリスト教理解」

講師：朱海燕 協力研究員

第2回 5/31（火）「東アジア近代史とアメリカ宣教政策」

講師：李省展 協力研究員

第3回 6/14（火）「遠藤周作とキリスト教」

講師：増田斎氏

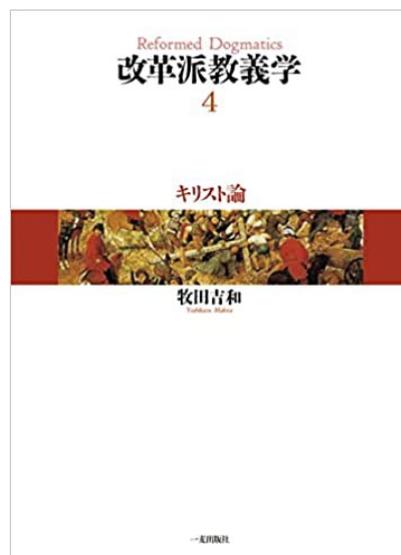
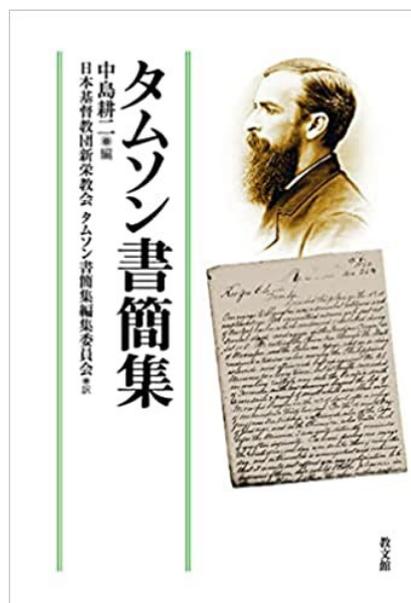
（国際日本文化研究センター博士研究員、京都ノートルダム女子大学非常勤講師）

第4回 6/21（火）「キリスト教と音楽 ～ミッションスクールの音楽教育～」

講師：長谷川美保 協力研究員

第5回 6/21（火）「アジアから発信する神学—身体からの問い—」

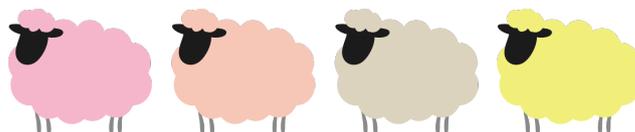
講師：植木献 所員



新着図書

- ・『福音と世界』No. 4、新教出版、2022。
- ・『福音と世界』No. 5、新教出版、2022。
- ・『福音と世界』No. 6、新教出版、2022。
- ・『福音と世界』No. 7、新教出版、2022。
- ・『賀川豊彦研究』第70号、本所賀川記念館、2022。
- ・『パトリスティカー教父研究—』第24・25合併号、教友社、2022。
- ・『タムソン書簡集』中島耕二編、教文館、2022年。
- ・『The Gospel of Judas』David Brakke 著、Yale University Press、2022。
- ・『キリスト教文化』第18号、かんよう出版、2021。
- ・『改革派教義学 第4巻 キリスト論』牧田吉和著、一麦出版社、2022。（神戸改革派神学校よりご寄贈）
- ・『フェリス女学院百五十年史 上巻』学校法人 フェリス女学院、2022年。

（フェリス女学院歴史資料館よりご寄贈）



MEMO



あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第88号

2022年7月19日 発行

明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37
TEL:03-5421-5210 / FAX:03-5421-5214
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩